

第八章 アルジェリア

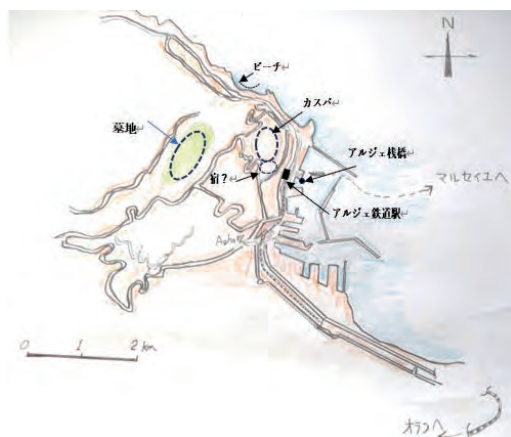
一 船旅・アルジェ着

アルジェリアの首都・アルジェまでは地中海を一泊二日で渡る船旅である（五月十六日午後四時半発、十七日午後三時着予定）。船は、バイカル号と比較すると、やや小さく思われた。この船の記憶として、乗客のほとんどが出稼ぎ労働者風のアラビア人と思われ領事館の職員のイメージと異なっていたこと、船室、特にトイレが汚かったことが思い出される。船室の椅子で一晩を過ごしたが夜は少し寒く中々眠れなかった。

ようやくアルジェの港が見えてきた。上陸前、不安そうな旅行者の一人に話しかけられたが、こちらも不安でありアドバイスがでなかった。



船からのアルジェ



アルジェ
(道路などはおおまか)

下船し、最初はいつもの宿探しである。
インフォメーションセンターみたいなところは分からず、看板を捜しながら街を歩いた。ホテルそのものが少ないように思われた。四軒目でやっと泊めてくれる場所が見つかった。きれいな地区から少し外れ、カスバ地区の近くであった。個室ではあったが、古く、設備もきれいではなかった。アテネの安宿と同じレベルの宿と思われた。しかし、やっと見つかって一安心であった。



アルジェのメイン通り



カスバ地区

1 カスバはアラビア語で「城塞」という意味がある。オスマン帝国領下の16世紀において、アルジェの丘に建てられたオスマン帝国の太守の城塞のことである。この城塞と海岸線と起伏のある地形に囲まれた一帯で人口が増加し、アルジェの旧市街が形成された。そして時代が下ると、この旧市街自体のことも「カスバ」と呼ばれるようになったとのこと。『フリー百科事典 ウィキペディア日本語版』。2021年3月11日(木) 02:00 UTC URL: <https://ja.wikipedia.org/アルジェのカスバ>

二 市内散策・カドゥ君との出会い

到着日、未だ明るかったのでホテルを出て、海岸沿いの大通りを散策した。東洋人はいない。大通りの外観はフランス国内とさほど変わらぬように思えた。ただし、通行人はやはり違う。マルセイユでもそれまでのヨーロッパの街中の通行人と少し変わってアラブ系の人達が目立ったが、ここはアラブ人達の街である。

そんな風に歩いていたら、一人の青年から声を掛けられた。英語で――

「どこから来ましたか？」

「日本です」

「私は数学を勉強している学生です。英語も勉強をしています。ボブ・ディランのファンです。英語の勉強のためアルジェの街を案内しましょうか？」

少し怪しさを感じたが、ボブ・ディランのレコードも持っているとのこと聞いて、ひとまず信用することにした。

そうして、彼の案内で、その日はカスバ地区やモスクを見物した。一人では、カスバ地区の中へ入る勇気がなかったのが幸運と思われた。カスバ地区の中の食堂で一人500円ほどの夕食（イワシのフライだったと思う。美味しかった）を取り、ホテル近くに帰ったのは、夜の十時くらいだった。

彼は、帰りのタクシー代をくれと言った。家がかなり遠いとのこと、少し怪しんだが、20ディナール（1600百円）を渡した。明日は、午前八時に迎えに来て、カスバ地区の中心部などを案内してくれることとなった。



アルジェの通り



アルジェの公園で

三 トラブルの予感

次の日は、約束通り、カドウ君の案内でカスバの中心地区を訪ねた。

案内されたのは、中心地区の他、近くにある墓地であった。なぜ墓地を案内されたかはよく分からなかったが、今での推測は、アルジェリア戦争のことを私に教えるためではなかったと思われる。その戦争が終わり、未だ十数年しか経過していないこと、そのおかげでアルジェリアが独立したことなど、アルジェリアの歴史を勉強しておらず、植民地時代のカミューの小説に描かれている街や海の風景（一九三〇年後半の頃か？）以外は基礎知識がなかった。本当に不勉強であった。反省される。

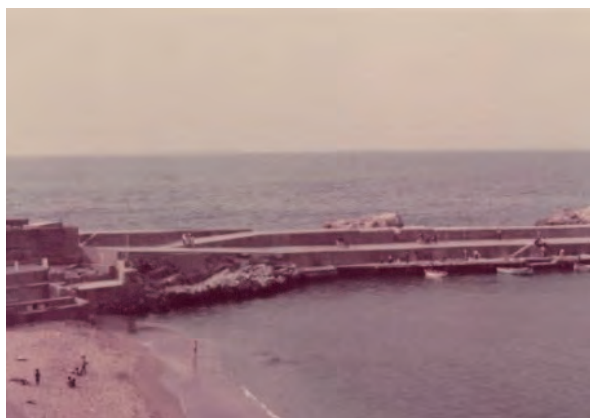
墓地では、彼は墓から頭蓋骨を取り出し、私に見せた。その意味はよく分からなかったが、さすがに写真撮影はためられた。

帰り際になると、「講義に使う本代のため、60ディナールを貸してくれ」とか「娼家の中を撮影するからカメラを5分間預けろ」とか言いだした。これは変だと思い始め、「君の家へ連れて行きボブディアンのレコードを見せて欲しい」と要求すると、上手くはぐらかされた。

2 1954年から1962年にかけて主にフランス領アルジェリアで勃発した、フランスとその植民地支配に対抗するアルジェリアとの間の独立戦争。この戦争は双方に多くの犠牲があったが、結果的にはアルジェリア側の勝利に終わりエビアン協定が締結され停戦しアルジェリアは独立を達成したとのこと。『フリー百科事典 ウィキペディア日本語版』。2023年9月13日（水）14:37 UTC
URL: <https://ja.wikipedia.org/アルジェリア戦争> 映画『アルジェの戦い』でも有名である。

四 海岸へ

翌日は、一人で待望のアルジェの海岸などを訪れた。異邦人の舞台の海岸と同じかどうかは確信が持てないが、岩肌と砂浜からなる海岸があつたので散策した。海水浴のシーズンには早いのか泳いでいる人は見なかった。『異邦人』に出てくる海岸を少しだけだが味わった。歩いていると少年たちが寄つてきた。どこから来たのかなどを尋ねられ、身振り・手振りを交え話していたら、空手やブルース・リーのことが話題となつた。日本人なら空手は知っているだろうということで、空手のポーズを要求された。決してうまくはなかったが、横蹴りのポーズを行い少し納得してもらつた。なお、大通りを散策中、アルジェで働いているという三人の日本人に会い、お茶（コーラ）を飲んだ。何を話したか覚えていないが、この時以外は、日本人には会わなかつた。



アルジェの海岸



海岸で

五 オランへ日帰り旅行

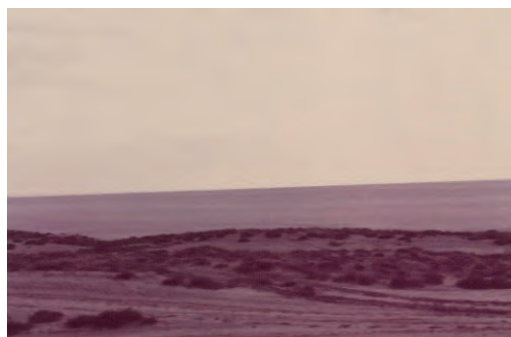
オランは、カミユのもう一つの小説『ペスト』の舞台である。アルジェから西へ列車で五時間程度の中都市である。日帰りで行けそうなので、朝早く列車に乗り、オランへ向かった。鉄道のルートを見てみると一部砂漠地帯を通るように思われた。

オランに着き、早速、街中を見物した。今度は、ラバ君という少年が寄って来て、街を案内することであった。この少年には何らあやしい点は感じられず、街中や公園を案内してもらった。時間をかけてじっくり観れば、アルジェとの違いが分かったと思うが、特別なことはその時は感じられなかった。後日、『ペスト』を詳細に読むと、「街が海に背を向けて建てられている」「中心部から海岸までの距離がアルジェと比較して少し遠い」ことなど、街の特徴として興味深い記述があるが、そこまでは、当時読み込めておらず、これも勉強不足だった。

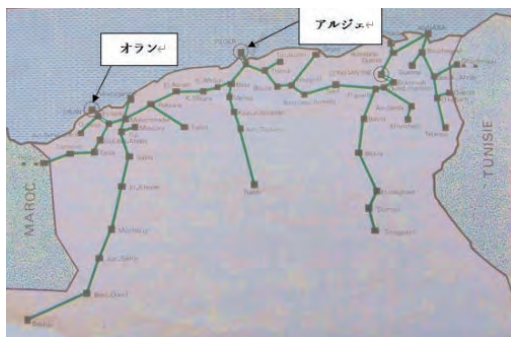
ラバ君とは記念写真を帰国してから送るという約束をして、手紙も一度もらったが、書いてある住所が判読できないなどの理由で写真を送っていない。大変申し訳なく思っている。

なお、この旅からかなり経ち会社人生を送っていた四十代の頃、上司の紹介がきっかけでイラン人のエマミさん³と仲良くなった。夫婦でテヘラン、カスピ海、ヤズドを案内し

3 エマミさんからは、たくさんのことを教えてもらった。バス・ウィンドウ・セオリーは、「バス内から外を見ると、回りが動いているように見えるが、本当は自分が動いている」のが真実という話。世の中が動いているように見えるが自分が動いている。時間は常に過ぎて行っている。一瞬一瞬を大切に！と解釈していた。



オランへの列車から（砂漠が見えた）



アルジェ～オランの鉄道経路
(当時入手した案内図を使用)

でもらった。また、彼の家族（ヤズド在住）からも歓待してもらった。こんなこともあり中東の人達には親近感がある。このイラン旅行の時は、本格的な砂漠にも案内してもらった（ヤズド近郊の砂漠）。そこで薬莖を拾った。イラン・イラク戦争の時のものとの説明であったが、本当かどうかは分からない。しばらくはテレビ台の上に飾っていたが今は失くしてしまった。



オランの街



ラバ君と

六 口論・アルジェリアを出国

アルジェに戻ると宿にカドウ君が訪ねてきた。再現すると次のようなやりとりをしたと思う。

「街を案内したのに、十分なお礼をもらっていない」

「君は英語の勉強のため、案内すると言ったはずだ」

「僕は自分の時間を犠牲にして案内した。お礼は当然だ」

「食事代、交通費は僕が払った。余分なお金は持っていない」

「お金がないなら、カメラが欲しい」

「何を馬鹿なことを言う。カメラはこの一台だけだ」

こうして、だんだん声が大きくなっていき、つかみ合いにはならなかったが、大そうな口論となった。英語で口論したはずだが日本語も交えていたかも知れない。なんとか、お金もカメラも渡さずおしまいとなって部屋にも戻ったが、次第にその夜が怖くなってきた。彼が訪ねてきて、もう一度口論になったらどうしようと思った。部屋の鍵を厳重にロックしようとしたが、ロックの調子がおかしいことに気づいた。なんとというオンボロな部屋——あわてて、ドアの場所にバリケードを作ることとした。机や椅子などを積み上げた。明日は、帰りの船便がある日だ。便があつて良かった。少しでも早く、アルジェを離れたと思った。結局、彼は訪ねては来なかったので安堵した。

明くる日、マルセイユへ戻るための船着き場へ行き、アルジェリア出国の手続きをしている時だった。担当の役人と次のようなやりとりがあつた。語学力のせいで正確には分からないが——

「どこのホテルに泊まっていましたか？」

「……リッツホテルとかいう小さなホテルです」

「アルジェには、そのような名前のホテルはない」

「間違いなく、そのような名前のホテルであつた。発音は確かではないが、うそは言っていない」

「……」

信用されていないようである。

「別室に来て欲しい」

出航の時間が迫っているし、早くアルジェリアを出国したいのに「何てことだ」と思ったが、別室でまた似たような問答をした。後日、考えてみると、日本赤軍のメンバーと疑われていたのではと推測された。一九七五年前後、日本赤軍は、ヨーロッパや中東などでテロなどを起こしていた⁴。

結局、一時間程度の拘束で解放され、乗船できた。泊まったホテルは正確に覚えておくことが重要だと思った。

このような嫌なこともあったが、カドウ君には彼なりの言い分があったと思う。彼やアルジェの街に悪い気持ちは抱いていない。

なお、日本赤軍は、当初、パレスチナ解放人民戦線（PFLP）への義勇軍として活動を開始し、一九七四年に正式の日本赤軍と名乗った⁵のことであるが、当時、その名前は知ってはいたが自分の旅行に影響が出るとはまったく予想していなかった。今起きている「ロシアのウクライナ侵攻」や「イスラエルとハマスの戦い」のことを思うと、当時は、情報網も発達しておらずそのせいもあるだろうが、平和だったと思われる。安全に旅行ができるということはいかに素晴らしいことか、今、身に染みてそう思う。

4 日本赤軍事件、一九七二年のテルアビブ空港乱射事件、一九七三年のドバイ日航ハイジャック事件、一九七四年のハーグ事件など。

『フリー百科事典 ウィキペディア日本語版』。2023年5月7日（日）07:57 UTC URL: <https://ja.wikipedia.org/日本赤軍事件>
なお、あさま山荘事件は一九七二年の出来事。

5 日本赤軍の名称は以下を参照。『フリー百科事典 ウィキペディア日本語版』。2023年10月15日（日）03:33 UTC

URL: <https://ja.wikipedia.org/wiki/日本赤軍>